鏡川に彩る女の歴史

臨　水

悲運の半生

中国の霊峰に似るといわれる秀麗な筆山と、清冽鏡川を庭園とする割烹旅館「臨水」（名付け親故杉駿三郎＝高知新聞社重役・俳人）の六十年の歩みは、とても原稿紙七枚のスペースに盛ることはできない。

初代女将美代喜は、明治二十九年、香美郡明治村蔵入、土ケ内家の四女として生まれた。小学校にあがると、すぐ子守っ子に出され、蚕の季節には養蚕の手伝い、糸とりが始まると製糸工場へ臨時女工といった毎日で、友達と楽しく遊んだような思い出はない。

大正七年（一九一七年）ごろの彼女は、片倉製糸姫路工場で、脇目もふらず糸をとっていた。二度にわたる不幸な結婚の記憶から逃れるためでもあった。日本の生糸生産

初代土ケ内美代喜さん
（昭和14年10月）

工程をアメリカに紹介するため、全国から選ばれた六人の中に彼女がいたと聞けば、抜群の腕前だったことが察せられる。だが罹病のため断念の余儀なきに至り、元板垣退助伯の秘書で、伯の遺著『立国の大本』の編纂にあたっていた和田三郎宅で家政婦をしていた姉・種美を頼って上京。国民金庫の重役でもあった和田は、美代喜の境遇にいたく同情、部下と彼女の縁を結んだ。「私の生涯で最も幸福だった結婚生活」と彼女は述懐している。二十三歳から二十六歳までの四年間であった。

大正十二年九月一日の関東大震災は、一瞬にして東京を地獄絵に塗り替え、夫は銀座の国民金庫の社屋の下敷きとなって非業の死を遂げる。避難船「長崎丸」に便乗、八年ぶりに帰高。しばらく仕立物の請け縫いなどをしていたが、出入りの牛肉屋「松原」の女将にすすめられ、仲居奉公をはじめる。水商売への入門である。

仲居をやめて独立し、一膳飯屋をしたり、美人小路の銭湯を譲り受けて経営に乗り出すなど、事業家のきざしをみせはじめたころ、美代喜は四度目の結婚に失敗、その

夫との間になしたのが奈津子、澄子の姉妹である。思いあまって、母子心中を考えたことも一両ではなかったという。

水商売に生きる

苦難が彼女を育てた。再び「松原」の仲居になった彼女の胸中に「水商売、私の行く道はこの道、この道できっとやりあげよう。二児のためにも」の決意があった。小柄ながらひところは、女優になっては……とすすめられた美人でキップのよさで知られる美代喜に、心を寄せる者もなくはなかったが、そのころの彼女には、なんとか一日も早く一家をなしたい願いで一杯であった。

昭和初年、彼女は、松渕（高知市与力町）の「山崎旅館」を譲り受けた。女事業家土ケ内美代喜の誕生である。

昭和四、五年ごろから松渕一帯は様相を変え、まじめな旅館経営には不向きの場所になった。幼い二児の教育も考える美代喜は八方手を尽くし、南はりまや町潮江橋北詰めの東南、平

屋、土蔵各一棟を譲り受けた。地上の建物は「須賀の別荘」といわれ、土地は八百屋町（南はりまや町）川崎家所有の七十坪であった。

背負うだけの借金を背負ってもとめた二棟のうち、平屋を取り壊し、思い切って、そのころの高知には数少なかった木造三層を建築した。品位ある「臨水」の命名はこの時である。美代喜は三十六歳になっていた。

潮江橋北詰めといえば、そのころの高知市の表玄関の位置、旅館「臨水」は、たちまち衆目をひき、延命軒、城西館と肩を並べるまでになったが、外観の華やかさに引きかえ、内は大変な火の車であった。

昭和十二年は心忙しい年であった。土讃線全通記念南国大博覧会が開催され、大相撲の高知場所、日華事変と続く。

大相撲の一行中に第廿代木村庄之助がいた。「臨水」で、わずか数日の滞在であったが、美代喜の心尽くしは庄之助を感激させ、お互いに心を許す仲となり「死んだら一緒になろう」などと睦言を交わしたりした。後日、庄之助の訃に接した彼女は、自分の小指を切って愛のあかしとした。

翌十三年には国家総動員法が公布され、戦雲はどす黒く国土を覆い、同十九年には

B29の日本本土爆撃が始まり、同二十年七月四日高知市は大空襲のため、一夜にして焼け野原となる。

そのころ「臨水」と共に育った奈津子、澄子の姉妹は、疎開先に病を養う美代喜に代わって「臨水」の切り盛りをしていた。

廃墟と化した夜の高知駅に下りたった美代喜は、真っ直ぐ南へ向かって闇の道を歩いた。はるか南の方に二つ三つ、灯がともっていた。夢にまで見た我が家「臨水」の灯であった。

数寄屋造りの粋

戦後、美代喜は鷹匠町一に「臨水別館」を建て、さらに東京進出を試みるのだが、これからは、二代目「臨水」女将澄子夫妻との合作になるから、その夫妻に登場願おう。

昭和二十一年澄子は、十市（南国市）の北村一水（かつみ）と養子縁組をした。父北村氏は十市村長も務めた徳望家、一水はその二男、高知青年師範を出て、幹部候補生として

三十四部隊に入隊、戦後県庁入りして渉外課に勤めた好青年、進駐軍の関係で「臨水」に出入りしたのが縁の始まり。重厚で真面目、進取の気性に富み、先見の明がある。二人の間は、一杯のコーヒーとチョコレートで始まったという。澄子は、心広く頭の切れる女性、この二人のコンビが、その後の美代喜の事業に大きな支えの役をして今日に及んだ。

話を鷹匠町「臨水」別館に移そう。戦後間もない昭和二十二年、旧藩主山内家の所有になる鏡川畔の散田屋敷の一部百九十坪が売りに出ると聞いた美代喜の心は躍った。

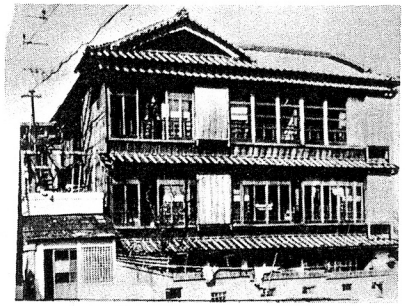
戦災をまぬがれた本館は、一級旅館としての貫禄を備えているとはいえ、建物自体は自慢にならぬお粗末さ、散田は歴史的由緒もあり、場所としても「臨水」の名にふさわしい。面積も理想的、美代喜は勝手にこと決めた。地価千五百万円という。美代喜は高知相互銀行の岡内社長に借金を申し込んだ。一文の取り引きもなしである。無鉄砲とも思われる美代喜の申し込みを、あっさり岡内社長は受けた。ただし支払いが大変であり、利子だけで月十五万円を超える。

山内家から土地を購入した美代喜は、今度こそ、自分の納得いくものを建てたいと思った。借金何ものぞ！　美代喜は金に糸目をつけぬ設計を頼み、自分から先頭に立っ

て土をならし、石を運んだ。全室とも柾、杉、松、竹、桧の最高材質を用いた純日本風仕上げである。大広間「桂」と「月」は茶室のしきたりにもとづいて宮大工熊沢某が設計した数寄屋造り、圧巻は「思い出の間」で下司凍月の天井絵が異彩を放ち、山内一豊公入国と銘する欄間はケヤキの一枚板を使った両面彫。終戦直後のこと、この数奇をこらした「臨水」は違反建築とみなされ、裁判沙汰にもなったが、これを担当したのが大西正男弁護士、また旅館の認可をもらうには時の厚生大臣林譲治らをわずらわせた。

東京へ進出

破竹の進撃を続ける美代喜ではあったが、その身辺は必ずしも安らかなものではなかった。心の憂さを晴らすべく、高知旅行クラブの面々と伊豆に遊んだ美代喜は、足を延ばして、東京・赤坂の「平野屋」に旅装を解いたが、ここから「臨水」の東京進出が始まろうとは……。



臨水本館（潮江橋北詰め 昭和７年）

赤坂の丹後町に手ごろなもの一軒を見つけた。これが奇しくも、新内閣金丸副総理夫人の所有になるものであった。

今では「臨水」東京店（港区赤坂三丁目「臨水ビル」・地下一、地上五階）活魚土佐料理の店として、高知「臨水」と相呼応して隆盛を誇っている。

今一人、どうしても登場してもらわねばならないのは「臨水」第三代女将土ケ内美智子さん（三七）。若く美しいこの女に「いらっしゃいませ」とにっこりされると、そぞろ一涼の薫風を覚えるのである。元川崎営林署長藤尾氏の息女「嫁ながら天晴れ」と二代目夫妻は目を細くし、三代目は「今小学六年生の男の子に四代目をつがせたいと思っています」という。

六十年が百年、さらに百五十年の繁昌が予約されている。

（昭和六十一年七月二十四日掲載　文・里見義裕）